

令和5年度香川大学ビジネススクール —地域の中小企業と経済活性化—

■講座概要一覧

回	日程	講義	講師
1	10月3日(火)	地域活性化の政策と実践	公益財団法人かがわ産業支援財団 理事長 近藤 清志
2	10月10日(火)	多様性と柔軟性で挑むグローバル企業への道 (仮題)	株式会社サンテック 代表取締役社長 青木 大海
3	10月17日(火)	「讃岐の酒蔵」の今とこれから	香川県酒造組合 会長 川人 裕一郎
4	10月24日(火)	地域の中小企業と地域活性化 ～「事業者連携」「民間創意」で持続可能な琴平を創る～	琴平バス株式会社 代表取締役 楠木 泰二郎
5	11月7日(火)	希少糖の産学官連携事業から商業展開への道のり	一般社団法人希少糖普及協会 代表理事 早川 茂
6	11月14日(火)	生き続けるために、時代に合わせて変化する	タケサン株式会社 代表取締役 社長 武部 興征
7	11月21日(火)	製造業から課題解決業への変化	高木綱業株式会社 代表取締役社長 高木 敏光
8	11月28日(火)	「ものづくり企業」の希望と課題	株式会社ダイコープロダクト 代表取締役社長 川北 康伸
9	12月5日(火)	世界を変える挑戦の始める方法と続ける方法	建口ボテック株式会社 代表取締役社長兼 CEO 眞部 達也
10	12月12日(火)	地域企業の役割とその先にあるビジョン	株式会社富士クリーン 代表取締役社長 馬場 太一郎
11	12月19日(火)	「ここに住みたい!!」とを感じる場所作り	特定非営利活動法人しおのえ 代表理事 藪内 由佳
12	1月16日(火)	『イルカと共に人生をより良くする』を本気で考えた 地方の弱小企業の20年間の歩みと今後の挑戦	株式会社日本ドルフィンセンター 代表取締役 寺山 弘樹
13	1月23日(火)	Ishigaki ビジネスイノベーション	株式会社石垣 取締役 石垣 真一郎
14	1月30日(火)	100年の歩みと次の100年に向けて ～五感で感じるオリーブ観光農園～	株式会社オリーブ園 代表取締役社長 永井 順也
15	2月6日(火)	Military Science (軍事学) からみる 企業経営	高松帝酸株式会社 代表取締役社長 太田 貴也

※講義概要・講師紹介は各ページをご覧ください

■ 講師

近藤 清志（こんどう きよし）

公益財団法人かがわ産業支援財団 理事長



【略歴】

昭和 36 年	善通寺市出身
昭和 59 年	早稲田大学政治経済学部卒業 香川県採用
平成 19 年	(財)かがわ産業支援財団へ派遣
平成 24 年	商工労働部企業立地推進課長
平成 28 年	商工労働部次長
令和 2 年	商工労働部長
令和 4 年	(公財)かがわ産業支援財団理事長



【紹介】

県職員として、観光振興、大規模土地開発、情報政策などの各分野で経験を積んだ後、平成 19 年度以降は一貫して産業振興部門を担当し、主に企業立地支援に取り組んだ。商工労働部長として、令和 3 年には番の州臨海工業団地を分譲開始以来約 50 年ぶりに完売させたほか、民有地を利用した企業誘致で成果を上げたため、経済人の一部からは「県庁の不動産部長」と冷やかされていた。

令和 4 年 4 月に(公財)かがわ産業支援財団理事長に就任。これまでの行政経験を活かし、企業や事業者の多様なニーズに対応するためのきめ細かな支援に力を入れている。

中小企業が持つ“無限の可能性”をパートナーとしてサポートし、一緒に地域を元気にすることを目指している。

■ 講義概要

地域活性化の政策と実践

県内企業の総合的な支援機関として、新産業の創出や地域企業の経営基盤の強化、産業技術の高度化、科学技術の振興などに取り組む(公財)かがわ産業支援財団の活動概要と香川県の産業の特色等について講義します。



■ 講師

青木 大海（あおき ひろみ）

株式会社サンテック 代表取締役社長



【略歴】

昭和 57 年	岡山県総社市出身
平成 15 年	関西外国語大学 卒業
平成 17 年	アメリカ大使館商務部 勤務
平成 19 年	リーマン・ブラザーズ証券株式会社 勤務
同 年	テンプル大学 卒業
平成 20 年	株式会社サンテック 入社
平成 25 年	同社 代表取締役社長 就任

【紹介】

2013年に株式会社サンテック代表取締役社長に就任。各種産業用の環境プラント機器といわれるタンクや熱交換器などを製造し、世界各国に展開。アフリカ、アジア、中東など海外からの人材を積極的に受け入れ、ミャンマーや中国、モロッコに製造拠点を構え日本のものづくりをグローバル展開している。直近では、カーボンニュートラル分野においては COURSE50 プロジェクト(水素還元製鉄)や D-Cocotte と呼ばれる油温減圧式乾燥機を通じて食品残渣をリニューアブルなエコフィードに変え、今後の食料問題を含む環境ビジネスを展開している。



■ 講義概要

多様性と柔軟性で挑むグローバル企業への道（仮題）

- 世界市民、飲水思源
- アジアとアフリカの市場が成長する背景(人口増)と、市場の成長を加速させる要因としての SDGs
- 経済と環境の両立

上記について講義する予定です。



■ 講師

川人 裕一郎（かわひと ゆういちろう）

香川県酒造組合 会長

【略 歴】

昭和44年	観音寺市出身 東京農業大学卒業
平成6年	川鶴酒造株式会社取締役 就任
平成16年	同社代表取締役 就任（現職）
平成20年	香川県酒造組合副会長 就任
平成29年	香川県酒造組合会長 就任（現職）
令和4年	日本酒造組合中央会 四国支部長 就任（現職）
（その他 役職等）	
	四国清酒懇話会 会長（平成30年～令和2年）
	香川県愛醸会 会長（平成26年～令和3年） 副会長（令和3年～現職）
	観音寺間税会 会長（令和5年～現職）



【紹 介】

香川県酒造組合は、次の事業に取り組んでいる団体です。

- ①讃岐の地酒の需要促進活動
- ②組合員（酒造会社）の経営改善や合理化の推進
- ③各種法律の遵守通達
- ④醸造技術の向上のための研修等開催
- ⑤業界発展のための各種施策実行

講師は、県内蔵元6社のうちの1社である川鶴酒造株式会社の代表取締役を務めながら、平成20年に香川県酒造組合副会長、平成29年から現在まで香川県酒造組合会長を務めています。

■ 講義概要

「讃岐の酒蔵」の今とこれから

- 日本酒業界の流れ
- 香川県の酒蔵の変遷～時代と共に～
- 香川県酒造組合の取り組み内容、啓蒙活動など
- 酒米「さぬきよいまい」の開発
- 香川県酵母「さぬきオリーブ酵母」の開発背景
- その他

上記について講義する予定です。



■ 講師



楠木 泰二郎（くすのき たいじろう）

琴平バス株式会社 代表取締役

【略 歴】

昭和 52 年	香川県出身
平成 11 年	新日本ツーリスト株式会社（現 株式会社コトバス・コミュニケーションズ）入社
平成 17 年	キャブステーショングループ 入社
平成 19 年	新日本ツーリスト株式会社 代表取締役就任（現職）
平成 23 年	琴平バス株式会社 取締役就任
平成 24 年	国土交通省「貸切バス運賃・料金制度ワーキンググループ」委員
〃	国土交通省「バス事業のあり方検討会」委員
平成 25 年	琴平バス株式会社 代表取締役就任（現職）

【紹 介】

香川県生れ。大学を卒業して家業である新日本ツーリスト（現 コトバス・コミュニケーションズ）へ入社。“Something New-時代の要請に応え続ける”“Connected mind-創客”をコアバリューとし、うどんタクシー、歩き遍路ツアー、瀬戸内国際芸術祭オフィシャルツアーなどを企画・運営。日本初のオンラインバスツアーが注目を集め、日本サービス大賞 2022 にて地方創生大臣賞・かがわ 21 世紀大賞 2023 を受賞。日本ご当地タクシー協会理事長。

■ 講義概要

**地域の中小企業と地域活性化
～「事業者連携」「民間創意」で持続可能な琴平を創る～**

コロナ禍で直撃を受けた香川県随一の観光地・琴平町。コロナをきっかけに世代交代や移住者による新規出店がすすみ、新しい流れが生まれつつある。

古より「一生に一度はこんぴらさん」と呼ばれた町を「一生のうち、何度も訪れたくなる町」へアップデートすべく、民間創意で取り組む琴平の各種プロジェクトの紹介を通じ、地域への関心を深めたり、琴平に係わるきっかけづくりが出来ればと考えています。



■ 講師

早川 茂（はやかわ しげる）

一般社団法人希少糖普及協会 代表理事



【略歴】

昭和 52 年	名古屋大学農学研究科博士課程修了
昭和 54 年	名古屋大学農学部助手
平成 3 年	香川大学農学部教授
平成 21 年	香川大学農学部長
平成 25 年	香川大学理事・副学長
平成 27 年	香川大学名誉教授・特命教授
令和 2 年	一般社団法人希少糖普及協会代表理事

【紹介】

講師は、希少糖を用いた食品開発研究に 20 年以上にわたって取り組み、産学官連携事業において民間企業における希少糖活用の支援を行ってきた。また、国際希少糖学会の事務局長として希少糖の世界への発信や希少糖研究者の育成に努めた。現在は(一社)希少糖普及協会の代表理事会長として希少糖の国内外に向けての普及活動を行っている。

■ 講義概要

希少糖の産学官連携事業から商業展開への道のり

自然界に微量しかない単糖である希少糖を生産する酵素を土壌中の微生物から単離し、希少糖の大量生産を目指す産学官連携事業が、香川大学を中心にして 20 数年前に香川県で立ち上がった。

研究開発と事業化は困難の連続であったが、「知的クラスター創成事業」や「都市エリア事業」などいくつかの産学官連携事業を通して、アルロースの大量生産が可能となり、民間企業での活用が始められた。

平成 13 年に設立した国際希少糖学会では、香川県において国際シンポジウムを開催し、希少糖研究者の育成ならびに香川県民や企業への希少糖の広報活動を行ってきた。このように産学官連携事業により、アルロースの商品利用価値の科学的根拠を明らかにするとともに、アルロース等を利用した商品開発がなされてきている。

産学官連携での希少糖の事業化について、商業展開を中心として講義を進めます。



■ 講師

武部 興征（たけべ こうせい）
タケサン株式会社 代表取締役 社長

【略歴】

昭和 58 年	小豆島町出身
平成 13 年	香川誠陵高等学校 卒業（1期生）
平成 18 年	東京薬科大学生命科学部 卒業
平成 18 年	国分株式会社 入社
平成 23 年	国分株式会社 退職
平成 24 年	慶應義塾大学大学院経営管理研究科 入学
平成 26 年	同卒業 タケサン株式会社 入社
令和 4 年	タケサン株式会社代表取締役 就任
令和 5 年	タケサンフーズ株式会社代表取締役 就任（兼務）

【紹介】

タケサングループは、小豆島において醤油、佃煮、惣菜の製造販売を行う企業グループです。特に、創業者が戦後間もない 1945 年 9 月に小豆島の醤油を「佃煮」として出荷したことが「小豆島佃煮」の発祥となりました。

現在グループ企業では、醤油の製造工場、調味料の製造工場、佃煮惣菜の製造工場と 3 工場あり、そこで製造した商品を全国の 4 営業支店を通じて、お客様にお届けしています。

10 年程前から小豆島にある醤油工場の近くに農園を作っており、現在はバジル、ハーブ、レモン、唐辛子を育てて、自社商品開発に使用しています。

講師は、食品卸売企業で勤務した後、同社に入社。主に経営管理、営業企画を経験した後に、昨年社長に就任致しました。

■ 講義概要

生き続けるために、時代に合わせて変化する

私からの講義というよりは、香川大学 MBA 講義参加者の皆様に、小豆島の醤油調味料企業、佃煮惣菜企業の経営を題材に、島特有の人口減少、また消費者の変化など様々な課題解決について、ご意見を頂きたいと思っています。

■ 講師

高木 敏光（たかぎ としみつ）

高木綱業株式会社 代表取締役社長



【略歴】

昭和 54 年	高松市出身 香川県立高松高等学校、慶應義塾大学経済学部卒業
	株式会社船井総合研究所に入社後、幅広い業種向けの新規事業戦略、成長戦略の策定と展開支援、中期経営計画策定、ブランディング、マーケティング、M&Aに係るビジネス DD 等に従事
平成 23 年	高木綱業株式会社 入社
平成 25 年	同社代表取締役社長 就任（現職）

【紹介】

昭和 29(1954)年に高松市で創業、翌年に現在の高木綱業として会社設立。繊維ロープの販売からスタートし昭和 39(1964)年に現在の本社所在地である高松市林町に工場を設立、合成繊維ロープメーカーとしての製造を開始。船舶・水産分野を中心に繊維ロープの製造・販売によりシェアを築く中、昭和 58(1983)年には陸上用保安灯の製造を開始し電子機器分野に進出。事業展開とともに営業地域も日本全国に拡大。

現在は繊維ロープと電子機器を2つの柱にその市場を電力・道路・通信・鉄道などインフラ関連、ロープ応用資材として建設・土木、またスポーツ分野等幅広い業界向けに製品開発・製造販売を展開。

近年では他分野の企業や公設試等との協業による研究開発や、試験・検査技術の開発とそれに関わる設備投資に注力。

積極的な新市場創造姿勢を評価頂き、中小企業庁「がんばる中小企業・小規模事業者 300 社」や高松市「瀬戸の都・高松が誇るビジネスアワード」等を受賞。

■ 講義概要

製造業から課題解決業への変化

創業からの市場・環境の変化と当社の歩みを照らし合わせながら、研究開発や設備投資、マーケティング面などにおける現在の取り組みや今後のビジョンについて触れ、時流の中で自社の強みをどう活かしていくか等の考え方を説明します。

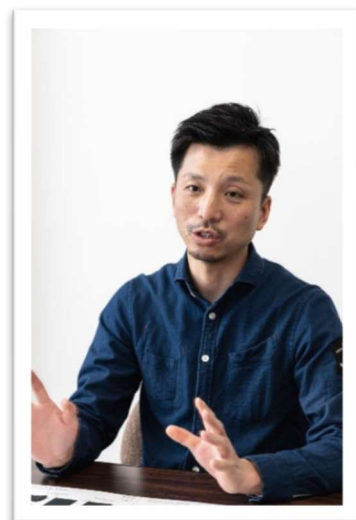
■ 講師

川北 康伸（かわきた やすのぶ）

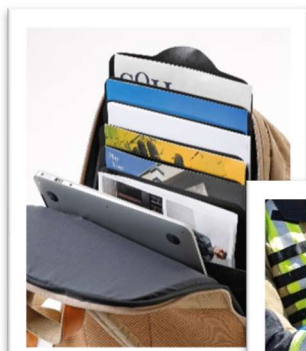
株式会社ダイコープロダクト 代表取締役社長

【略歴】

昭和46年	さぬき市出身
平成7年	日本大学商学部経営学科卒業
同 年	株式会社バツ（アパレル）入社
平成11年	有限会社大香（現 株式会社ダイコープロダクト）入社
平成23年	公益社団法人東かがわ青年会議所理事長（任期1年）
平成28年	株式会社ダイコープロダクト 代表取締役社長 就任
令和5年	日本手袋工業組合副理事長 就任



【紹介】



1963年手袋製造業として発足。2023年に創業60年を迎える。
現在は手袋・袋物類の二刀流縫製工場。国内生産比率は約50%ということで、従業員30人以上の規模の中では比較的国内生産比率が高い。

手袋は特殊作業用、スポーツ・アウトドア用、ファッションの3つのジャンルを手掛けており、年中手袋を製造している。バッグはナイロンやポリエステルといった化繊やソフトレザーを使用したカジュアルテイストのファッションバッグを中心に、防災バッグや業務用のバッグ・ケースを手掛ける。

自社ブランドにも力を注いでおり、消防向けの手袋やベルトなどを展開するBULLRESCUE、特殊作業用手袋のDK、WORKS、メンズカジュアルファッション手袋のSoH、スライド機能を付与したバッグのstairs design productsといった個性あふれるブランドを展開している。

■ 講義概要

「ものづくり企業」の希望と課題

弊社は創業以来60年間ものづくりに従事してきた会社で、弊社が製造するのは手袋やバッグといった最終消費財、すなわち製造されたものは直接消費者の手に届けられるもの。

消費者＝人間の欲望には限りがなく、時代とともに変化するものであり、そうした欲望の少し先を想像しながら生み出された、消費者にとって価値ある商品というモノが売れる商品ではないか。価値ある最終消費財を生み出すことさえできれば、形にすることは専門分野なので、後はどう流通させるのかを考えれば様々な成長戦略を描くことができるので、今後さらに希望は膨らむ。

一方、いいアイデアがあっても形にするためには人の力が必要である。特に手袋やバッグといった縫製品は機械化しづらい製品ということもあり、近年では生産拠点を100%海外に移す会社も少なくない中で、MADE IN JAPANを求める声は無くなってはいない。となると日本の中で製造に従事する人を今後どれだけ確保できるのかが最大の課題である。

モノづくり企業としての当社の希望を解説し、業界が抱える共通課題を知っていただきながら、いかにして今後成長していくのか、皆様と共に考える機会にしたい。



■ 講師

眞部 達也（まなべ たつや）

建ロボテック株式会社 代表取締役社長兼 CEO

【略歴】

昭和51年	香川県さぬき市出身
平成10年	父親が創業した建設専門工事会社「(有)都島興業」に入社
平成23年	(有)都島興業の2代目代表取締役社長に就任
平成25年	EMO(株)を設立
令和元年	建ロボテック(株)に社名変更
令和2年	「鉄筋結束トモロボ」を発売開始
令和3年	トモロボが四国発明表彰において、「文部科学大臣賞」受賞
令和4年	トモロボが第34回中小企業優秀新技術・新製品賞において、「中小企業庁長官賞」を受賞
令和5年	経済産業省「J-startup」に選定



【紹介】

1976年香川県さぬき市生まれ、職人に憧れて料理人を目指したが挫折し、父親が創業した建設専門工事会社に入社。22歳から10年間の鉄筋職人として経験を積む中で、建設というスケールの大きいモノづくりでの小さな生産過程の無駄を感じ、2004年32歳時に取締役専務・2011年に2代目の代表取締役社長として就任。

工事会社の経営を行いながら、建設現場の無駄を研究し省力化製品の開発を目的に2013年EMO(株)を設立。これまでの当たり前を打ち壊す省力化資材を発表する中で、資材での省力化は根本的な解決にならないと考え、「人とロボットが共に楽しく働ける建設現場」を目指して2016年にロボットの開発に着手。

2020年鉄筋結束ロボットの完成と省力化ロボットブランドであるトモロボの立ち上げを機に「世界一ひとに優しい現場を創る」をミッションに建ロボテックに社名変更し現在に至ります。

座右の銘は、小淵恵三氏が残された「宿命に生まれ、運命に挑み、使命に燃える」。



■ 講義概要

世界を変える挑戦の始める方法と続ける方法

これまで人手のみで生産されていた生産方法ではなく、新しくロボットを提供する未知の市場への市場開拓のプロセスと続けていくための社内概要の環境構築について自身の経験談から伝える。

■ 講師

馬場 太一郎（ばば たいちろう）
株式会社富士クリーン 代表取締役社長

【略 歴】

昭和 57 年	綾川町（旧綾上町）出身
平成 17 年	金沢工業大学工学部 環境システム工学科卒業
〃	ケイヒン株式会社（貿易業・東証スタンダード(旧東証一部) 上場企業) 入社
平成 20 年	渡米
平成 23 年	ゴールデンゲート大学大学院 MS IMC 卒業
平成 27 年	同大学 MBA International Business 卒業
平成 28 年	株式会社富士クリーンに帰社

【紹 介】

弊社は、約半世紀にわたってごみを適正、安全処理をモットーに、収集運搬から、各種中間処理、最終処分と一貫したサービスを皆様に提案してまいりました。今後の産業廃棄物処理業に求められることは地球にやさしい資源を生み出すことです。廃棄物は資源であり、処理の過程において再生エネルギーを生み出すことができるか。この課題にこの先の 50 年挑戦してまいります。

2018 年に完成した、国内初の縦型乾式メタン発酵施設は、有機物系廃棄物から、メタンガスを回収し、熱エネルギー、再生電力を創り出します。環境にやさしい renewable energy を地域の産業に供給し、環境にやさしいモノづくりをテーマに、社会の循環の輪に貢献していきます。

■ 講義概要

地域企業の役割とその先にあるビジョン

地域経済の中でどのように企業価値を創造するのか。これは地方地域で活動している企業には、とても重要な事です。SWOT 分析から見る客観的な分析は、自社の内部改革と外部環境への柔軟性（適合力）を高めるには最低限必要な事です。

様々な要因が絡む現代社会で自社らしさ、業界他社との差別化が地域企業の大きな武器になることを講義の中でお伝えします。

■ 講師

藪内 由佳（やぶうち ゆか）

特定非営利活動法人しおのえ 代表理事

【略 歴】

昭和 59 年	高松高校卒業
昭和 63 年	香川大学卒業
平成 17 年	特定非営利活動法人しおのえ 入社
平成 30 年	代表理事 就任

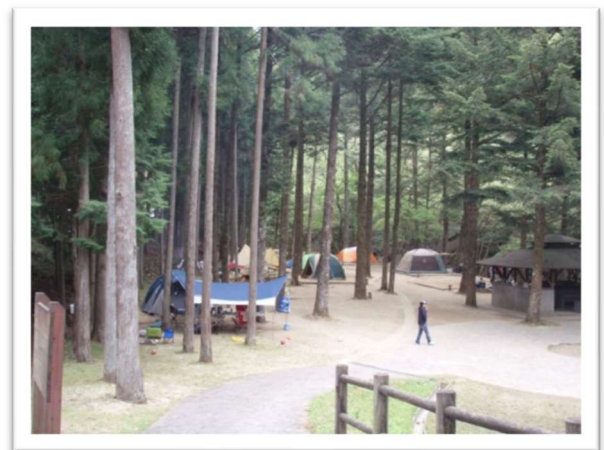
【紹 介】

婚姻後、埼玉県に在住していたが、長男のぜんそくがひどく、帰郷とともに、当時の塩江町が高松市に合併される際に、地元の有志で立ち上げた団体である特定非営利活動法人しおのえへ入社。廃屋であったリゾートホテルを法人で取得し、体験のできる宿泊施設として開業から関わる。また、香川県所有の県民いこいの森野営場の指定管理を受け、管理運営中である。ホテルも、キャンプ場も過疎高齢化の進む町の地域活性化を目的として運営中。

■ 講義概要

「ここに住みたい！！」と感じる場所作り

ホテル経営・キャンプ場管理を通じて、観光によるまちづくりを模索していることを、お話しさせていただきますと思います。



■ 講師

寺山 弘樹 (てらやま ひろき)

株式会社日本ドルフィンセンター 代表取締役



【略歴】

昭和50年	福島県郡山市出身
平成13年	大阪府立大学(現 大阪公立大学)農学部獣医学科卒業 有限会社オフィスケイ(深江橋動物病院)入社
平成14年	株式会社アスクジャパン 入社 大川郡津田町(現さぬき市津田町)のイルカ試験飼育に従事
平成16年	株式会社日本ドルフィンセンター 入社 日本ドルフィンセンターの事業に従事
平成19年	同社日本ドルフィンセンター センター長 就任
平成21年	同社取締役センター長(事業統括担当) 就任
平成23年	同社代表取締役 就任(現職)



(その他 役職等)

- 一般社団法人日本水族館協会 理事
- 一般社団法人さぬき市津田地区まちづくり協議会 代表理事
- 一般社団法人さぬき市観光協会 理事
- さぬき市商工会 理事
- 公益社団法人香川県獣医師会 理事
- 香川県動物愛護推進懇談委員会 委員

【紹介】

日本ドルフィンセンターは、日本でも数少ないイルカとの触れ合いを専門とする施設で、2004年に開業し、20周年を迎えました。『イルカと共に人生をより良くする』という理念のもとに、障害の有無や性別、年齢、国籍等を問わず全ての方にイルカと触れ合っただけの体験型事業や、ドルフィンセラピーと呼ばれるイルカを活用した人の健康や福祉に寄与する特化型事業も各専門機関等との連携により継続的に実施しております。またイルカの海を通した環境教育にも力を入れており、さぬき市の地域観光の一躍を担えるように日々頑張っております。

■ 講義概要

『イルカと共に人生をより良くする』を本気で考えた
地方の弱小企業の20年間の歩みと今後の挑戦

日本ドルフィンセンターのイルカ触れ合い事業は、現在においても解決できていない諸問題により、順風満帆な運営とは言えず苦難の連続でした。その中で開業から20年間で大きく飛躍することもできませんでしたが、大きく低迷をすることもなく、なんとか運営を続けてこられたのは、『イルカとの触れ合い』に特化した隙間事業を本気で実施し、事業を多角化せず、自分たちができることをお客様に提供し続けたためと考えています。その歩みと、次の20年に向けた新たな事業への挑戦に関して講義します。



■ 講師

石垣 真一郎 (いしがき しんいちろう)

株式会社石垣 取締役



【略 歴】

平成 12 年	成蹊大学法学部 卒業
平成 16 年	株式会社巴川製紙所 入社
平成 23 年	株式会社石垣 入社
令和 2 年	同社取締役 就任 (現職)



【紹 介】

1958 年に製塩機器の製造・販売・補修を事業として坂出市で創業。固液分離技術をコアとして、水インフラ分野や産業分野において脱水機、ろ過機、ポンプなどを販売。上下水道向けのスクリーンプレスやフィルタープレス、浸水対策用のポンプは、国内市場トップシェア。発祥の地である坂出市は、

現在も開発・設計・製造の中核拠点。石垣のソリューションは海外でもグローバルに展開し、世界各地に現地法人や販売ネットワークを構築。「水」を守り支える企業として社会に貢献し、持続可能な社会の実現を目指す。

2022 年に「全速全水位型横軸水中ポンプ」が令和 4 年度四国地方発明表彰「中小企業庁長官賞」並びに第 48 回発明大賞「発明功労賞」を受賞。



■ 講義概要

Ishigaki ビジネスイノベーション

1958 年創業以来、国内外の水インフラを支え社会に貢献してきた「石垣」。当講義では、石垣のユニークな製品群を紹介すると共に、刻一刻と変化する事業環境の中で「新結合」をテーマとした新事業創出の為の新しい取り組みをご紹介します。



■ 講師

永井 順也 (ながい じゅんや)

株式会社オリーブ園 代表取締役社長

【略歴】

昭和43年	小豆島町出身
昭和61年	香川県立小豆島高等学校卒業
昭和62年	北海道大学入学
平成13年	株式会社オリーブ園入社
平成23年	株式会社オリーブ園取締役就任
平成25年	株式会社オリーブ園専務取締役就任
平成29年	株式会社オリーブ園代表取締役就任(現職)

小豆島オリーブ園
OLIVE GARDEN 1st origin since 1919

【紹介】

当園は1919年に民間としては日本最初のオリーブ農園として開園し、1972年に法人化したオリーブ専門の観光農園です。園内及び小豆島にて収穫したオリーブ果実を採油・加工し、様々なオリーブ製品を製造販売しています。開園から100年以上が経過した園内には、小豆島におけるオリーブ栽培の歴史を刻み込んだオリーブの樹々が群生し、ミモザやジャスミンなどの観賞用植物の栽培管理も行っています。



講師は平成13年に生まれ故郷に戻り、知人から紹介されたオリーブ園に就職させていただき、入社後は様々な面で社内改革に取り組みました。小豆島への観光客誘致にも注力する一方で、小豆島オリーブ園の観光農園としての付加価値向上にも取り組んでいます。

講師は平成13年に生まれ故郷に戻り、知人から紹介されたオリーブ園に就職させていただき、入社後は様々な面で社内改革に取り組みました。小豆島への観光客誘致にも注力する一方で、小豆島オリーブ園の観光農園としての付加価値向上にも取り組んでいます。

■ 講義概要

100年の歩みと次の100年に向けて
～五感で感じるオリーブ観光農園～

1. 小豆島オリーブ園の歩み
2. 入社してからの取り組み
3. 100年後の農園継承に向けての取り組み

大まかには、上記の項目に沿ってお話しさせていただく予定です。



■ 講師

太田 貴也（おおた たかや）
高松帝酸株式会社 代表取締役社長

【略 歴】

	高松市出身
平成 16 年	日本エア・リキード合同会社 入社
平成 20 年	高松帝酸株式会社 入社
令和 5 年	（4 月）同社 代表取締役社長に就任

【紹 介】

弊社は昭和 25 年に高松市で創業した高松酸素株式会社がスタートになります。当時は酸素ガスの製造が本業で、造船所などで鉄を切ったり、ひっつけたり（切断と溶接）するために使われていました。高度経済成長期に高圧ガスの需要が急拡大する中で、フランス本社のエア・リキード社と高松酸素の合併でできたのが高松帝酸（←帝国酸素の略）です。今では製造業と医療機関のお客さんに対して、さまざまな高圧ガス（窒素、炭酸、水素、ヘリウムとか）とサービスを提供しています。

講師は高松市出身、大学では物理学を専攻、卒業後に日本エア・リキード社に入社。入社後は、日本製鉄（姫路）に隣接する酸素工場勤務、東京本社での技術営業を経験後に 2008 年に高松帝酸に入社。在学中に、高圧ガス 製造保安責任者 甲種機械を取得。「ガスのことを語らしたら右に出るものはいない」と思っている。趣味は軍事全般。月間軍事研究という雑誌を毎月かかさずに読んでおり、現役自衛官に驚かれる（引かれる）くらいの域に達している。

■ 講義概要

Military Science（軍事学）からみる 企業経営

軍事（ミリタリー）という分野は、日本ではあまり知られておりませんが、単なる戦闘／戦術以外にも、政治、地理、天候、人事、統率、情報、兵站、法務、広報、科学、兵器など、さまざまな分野が複雑に絡み合っています。軍事は絶対に失敗が許されない、失敗＝国家・民族の滅亡に繋がるので、その本気度は他の学問を大きく上回っていると思っています。今回はそれら軍事学の各分野から、企業の経営に生かせる部分を、かいつまんでご紹介いたします。